

命や生活に関わらないようながら早期に発見する「過剰診断」が国レベルで進んでしまったのが韓国の甲状腺がんです。

1999年から始まった国主導のがん検診で、乳がん検診のオプショナルとして、甲状腺がん検診も受けられることになりました。すると、甲状腺がんの発見が急増し、20年で患者数が15倍にまで増え、2012年には女性のがんの約3分の1が甲状腺がんとなりました。一方、甲状腺がんによる死亡率は全く下がっていませんでした。

実は、日本でも、国家レベルで過剰診断が行われたことが過去にありました。小児がんの一種である「神経芽細胞

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

福島の小児検診見直しを

年国が3億円、都道府県が6億円の経費を負担し、3000人近くに神経芽細胞腫が発見されました。

しかし、検診を行ったことで、たしかにこの病気の発見率は2倍近くになりましたが、死亡率の減少は確認されませんでした。手術や抗がん剤の副作用で亡くなるケースがあった一方、検診で見つ

全国で行われてきた神経芽細胞腫の集団検診は中止されることになったのです。

韓国でも、14年ごろから、科学者が甲状腺がんの過剰診断に対して警鐘を鳴らし、マスコミも大きく取りあげました。「アンチ過剰診断」と言えるキャンペーンが進んだ結果、甲状腺がん検診の受診者数はピーク時から半減し、発見数も激減しています。ジェットコースターのようなアップダウンです。

ほとんどの小児甲状腺がんは「死に至る病」ではありません。韓国や神経芽細胞腫の例を踏まえ、福島の小児甲状腺がん検診を見直す時期に来ていると思います。

腫（神経の元になる神経堤細胞が悪性化したもの）の集団検診です。

神経芽細胞腫は、1歳未満で発見されるとほとんどが治るのに対して、1歳以降では

死亡率がぐっと高まります。

そこで、1984年から生後6カ月の乳児全員の尿を検査することで、この病気を早期に発見する国レベルの検診が始まりました。03年まで、毎

ったがんが自然退縮した例も多数見られました。なお、甲状腺がんでも自然な退縮や消滅はさほど珍しくありません。

そして、03年、厚生労働省がまとめた報告書を受けて、